

選評

平岡洋子「メルボルンのヴィクトリア国立美術館蔵《キリストの奇蹟の祭壇画》 図像解釈と制作年代」

本論は、これまでわが国で紹介されることの少なかった15世紀末のフランドル美術において、プティ・メートルと呼ばれる群小画家たちの共同制作による《キリストの奇蹟の祭壇画》に注目し、主にその意味を扱った好論文である。筆者平岡洋子氏は、中央パネルの構図の特異性にまず着目しながら、緻密な図像解釈学的方法により、祭壇画全体が聖体の秘蹟と復活に関わること、および、ここで強調されるペテロがローマ教皇庁を象徴することを、説得力のあるやり方で指摘した。そして、ペテロによる恩恵授与のモチーフを、ローマ教皇庁による承認をアピールするものだと解釈することで、画面の主題を制作当時の政治的、社会的状況と結びつけることに成功している。

祭壇画を当時の社会状況に関連させるファクターは、何よりも画面に描き込まれた「偽装」肖像画の座主たちである。当時の他の肖像画や肖像素描などの視覚的資料を駆使した丁寧な座主同定は、本論の魅力のひとつであると同時に、また、この種の同定につきものの不安定さを伴うことも否めない。しかしながら氏は、ドゥヴィーズという遊戯的紋章や金羊毛騎士団の勲章などの文化史的モチーフを巧みに利用して、この不安定さの解消に努めており、同定の多くが妥当性に富むものである。そして氏は、同定された座主たちの歴史的情報を、画面の図像学的主題と照応させながら、従来の西欧の学者たちの見解に反して、注文主の新たな可能性を提示する。すなわち、本作品の注文主は、フランドルがハプスブルク家という外国勢力の支配下に入らんとする激動期に生きた、フィリップ・ドゥ・クレーヴという反ハプスブルク勢力の中心人物であることを、的確に論証するのである。

以上のように本論は、画面の図像解釈を手がかりのひとつとしながらも、そこに留まることなく、画面を交差する文化史や政治史の断章を深く掘り下げ、この作品の意味や当時の具体的な機能を浮き彫りにしている。またそれによって、制作年代の設定がほぼ確実なものとなっていることも付け加えておくべきであろう。

わが国で紹介されることが少なかったといっても、自治都市の活動が列強によって再編され始める激動の近世初期は、歴史的に重要な転換点であり、たとえ巨匠たちの時代ではなくても西洋美術史における意義は看過されない。こうした時代の注目すべき領域における作品に関して、従来の学説を覆す強力な新説を提示し得たことは、わが国における西洋美術史研究の水準の高さを示す大きな功績だと言わなければならない。以上により、平岡洋子氏に『美術史』論文賞を贈り、その努力と功績とをたたえたい。